

精神疾患を有す大腿骨骨折患者における理学療法の帰結に関する多施設研究

～日常生活動作が改善し、約半数が歩行の再獲得を期待できる～

【研究背景】

大腿骨近位部骨折は高齢者の転倒時に多く発生する外傷である。転倒は精神科の事故報告全体の 20%を占め、転倒による経済的損失は年間 7,200 億円にも上る。わが国では、精神科入院患者の高齢化や入院の長期化が問題となっているが、精神科で理学療法が実施できる施設は少なく、その実態や治療効果は明らかになっていない。そこで、本研究では、精神科病棟に入院する患者を対象に、大腿骨近位部骨折術後の理学療法の帰結に関する多施設研究を行った。

【対象と方法】

5 施設の精神科病棟に入院し、大腿骨近位部骨折術後の理学療法を実施した 334 名を対象とし、カルテから後方視的に調査した。最終的に除外基準を満たした患者を除いた 183 名（平均年齢 73 歳）を分析対象とし、入院時と退院時の FIM*スコアの比較、歩行再獲得率、自宅復帰率、自宅復帰に関連する要因についての分析を行った。

*FIM (Functional Independence Measure)：日常生活動作の評価法で、大きく「運動項目」と「認知項目」のふたつに分けられ、どの程度介助が必要かによって採点される。

【結果】

FIM スコアは、入院時と比較し退院時で有意に高かった。歩行再獲得率は 47.9%であり、この数字は認知症患者を対象とした先行研究より高いが、認知症のない患者を含めた先行研究よりは低かった。自宅復帰率は 15.8%であり、自宅復帰に関わる要因は、骨折の受傷場所が自宅であること、入院時の FIM 認知項目得点が高いこと、退院時の FIM 総得点および運動項目得点が高いことであった。

【結論】

精神科病棟に入院し、大腿骨近位部骨折術後の理学療法を実施した患者を対象に理学療法の帰結に関する多施設研究を行った。入院時と比較し、退院時の FIM スコアは有意な向上を認め、歩行再獲得率は 47.9%、自宅復帰率は 15.8%であった。

謝辞：本研究にご協力いただいた平川病院、ホスピタル坂東、山容病院、ためなが温泉病院、秋津鴻池病院のスタッフの皆様に感謝いたします。

【本稿は Progress in Rehabilitation Medicine に掲載された以下論文の日本語要旨である】

Sae Uezono, Yusuke Ishibashi, Shouichi Kuramochi, Seiji Kaganoi, Takuhiro Ikeda, Takahiro Shimohira, Munenori Katoh. Gait Reacquisition Rate, Home Outcome Rate, and Gait Prognosis in Patients with Femoral Neck Fractures and Mental Illness - A Multicenter Study. Prog Rehabil Med (Advance online publication). 2020.